

[026/027]九州人類学会報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2320973>

出版情報 : 九州人類学会報. 26/27, 2000-11-22. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

巻 頭 言

九州人類学研究会会長 大谷 裕文

「九州人類学研究会を創設しよう」という構想が最初にもちあがったのは、1971年の夏休み前であったと記憶しています。当時、「村落研究会」という小さな研究会が不定期に開催されていましたが、この研究会を「発展的」に解消して、新たに九州地区における文化人類学と隣接諸科学の発展・普及を図るために、「九州人類学研究会」を創ろうという構想です。この構想は、その時、九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設の助手を務められていた小野沢正喜氏のご尽力によって徐々に具体化されていき、1972年9月に、文化人類学、自然人類学、考古学、日本民俗学、言語学など様々な分野の研究者からなる九州人類学研究会の誕生となって実現しました。そして、最初の九人研会報（創刊号）が1973年に発行されました。この九人研の誕生から起算して、まもなく30年の節目を迎えようとしています。この間、九人研が、紆余曲折を経ながらも、ともかく存続し、ささやかではありますが九州地区の文化人類学と隣接諸科学の研究に一定の貢献をしてきたことを素直に喜びたいと思います。

とはいえ、近年の九人研は、例会・総会出席者の減少、会費収入の減少、会報印刷費の高騰、九人研内部の士気の低下、不明確な役割分担等の問題を抱え、大きな危機に直面しています。このような事態に対処する為に、過去2年間、支出を少しでも抑える為に例会案内はできるだけ電子メールで行う、考古学、日本民俗学、ユートピア論など隣接諸領域の研究者の発表を増やして九人研会員の多様な関心に応える、運営委員の役割分担を再確認する、といった措置をとってきましたが、必ずしも十分な効果が上がったわけではありません。また、かつて一度試みて好評を博した公開講座ないしは市民大学講座のような催しを定期的で開催するという案も浮上していましたが、この案もまだ実現していません。幸いなことに、このたび、九人研の現状の打破に並々ならぬ意欲を示して下さっている関一敏先生が次期九人研会長を引き受けて下さることになりました。今後は、関一敏会長を、他の九人研会員とともに、できるだけサポートして、より良い状況の中で九人研30周年を迎えることができるように努力していきたいと思っています。最後になりましたが、九人研会報の編集・発行のために、貴重な原稿をお寄せ下さいました諸先生方に厚く御礼申し上げます。